



TITLE:

箱庭療法における作り手の心理的
変容に関する研究 ―イメージと関
係性の視点から― (Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

千葉, 友里香

CITATION:

千葉, 友里香. 箱庭療法における作り手の心理的変容に関する研究 ―イ
メージと関係性の視点から―. 京都大学, 2017, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20122>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（教育学）	氏名	千葉 友里香
論文題目	箱庭療法における作り手の心理的変容に関する研究 —イメージと関係性の視点から—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、箱庭療法において箱庭を制作する作り手がなぜ心理的に変容するのかという、箱庭療法における本質的テーマを問題意識として、それをもとにして行われた諸研究が、箱庭制作のなかで作り手に生じてくるさまざまな心理的体験に焦点を当て、その体験の心理臨床学的な意味を考察することによって、かかるテーマにひとつの答えを見出す目的をもって臨床的にまとめられたものである。</p> <p>論文は上述の問題意識を具体的に述べた序章に始まり、日本の箱庭療法における作り手の心理的変容に関する研究を〈臨床事例研究〉〈見守り手に関する研究〉〈言語化に関する研究〉〈箱庭用具や治療空間に関する研究〉〈作り手の心の動きや主観的体験に関する研究〉の5つの観点からサーベイした「箱庭療法における作り手の心理的変容の機序—我が国における箱庭研究の概観と展望より—」と題した第1章、本論文の鍵概念のひとつである「イメージ」を取り上げて定義づけ、箱庭制作後に作り手が自らの箱庭についてことばにすることによる制作直後の作り手のイメージ変容の体験について調査研究によって検討した「制作後に箱庭を言葉にすることにおける作り手のイメージ変容の体験—4つの体験型とその意味—」と題した第2章、「心理臨床におけるイメージとイメージを体験する主体との関係性」と題して、もうひとつの鍵概念である「関係性」をイメージと主体の在りようとして捉えて論じた第3章、箱庭の特徴である三次元性に着目して、イメージとそれを体験する主体との関係性が、箱庭と作り手との関係性として表れてくる際の特徴について検討した「箱庭と作り手との関係性の特徴—箱庭における三次元性に着目して—」と題した第4章、第2章から第4章で検討された箱庭と作り手との関係性を調査研究として実証的に明らかにする方法を検討し、関係性の非言語的表現に関する先行研究をサーベイした上で、箱庭と作り手との関係性を表現するためのオリジナルな非言語的方法として「関係性図」について考案した「箱庭と作り手との関係性を表現するための方法—関係性を非言語的に表現すること—」と題した第5章、以上を踏まえて箱庭制作による作り手の心理的変容について調査研究を行い、その結果をまず「箱庭制作後における箱庭と作り手との関係性—関係性図の分析から—」と題して箱庭と作り手の関係性の在りようについて検討した第6章、関係性の変化の様相を、作り手を群に分けることで論じた「箱庭制作後における箱庭と作り手との関係性の変化—体験群の意味と量的分析の視点から—」と題した第7章、4名の調査事例を取り上げ、箱庭との関係性の視点から捉えた作り手の心理的変容について事例研究的に考察した「箱庭制作後における箱庭と作り手との関係性の変化—作り手の変容に関する調査事例の検討—」と題した第8章、そして「箱庭療法における作り手の心理的変容—イメージと関係性の視点から—」と題して、箱庭療法によってなぜ作り手の心理的変容が生じるのか、その機序について結論づけるとともに今後の課題を述べた終章から成っている。</p> <p>冒頭に述べた箱庭療法における本質的なテーマに対して、本論文は、箱庭制作を通して作り手の心理的体験の広がりから生まれてくる自律的な「イメージ」と、箱庭と作り手との「関係性」という視点から箱庭療法における作り手の心理的変容を捉えることの意義を実証的に明らかにし、臨床実践に架橋する視角を提示している。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文の価値は、箱庭を作ることによってどうして作り手に心理的変容が生まれるのかという、箱庭療法が日本に導入されて以来、現在に至るまで議論され続けている本質的テーマについて、「イメージ」と「関係性」という心理臨床学では一般的ではあるものかならずしも共通理解が得られているわけではない概念を著者なりに両者を関連づけて明確に定義し、かかるテーマにひとつの答えを提示したことにある。加えてその結論に至る過程のなかで著者のオリジナルな創意工夫と考察が箱庭療法研究はもとより心理療法研究に新たな視点をもたらしており、実際の臨床事例を扱っているわけではないにもかかわらず、きわめて豊かな臨床性が読み取れる点で出色の論文となっている。それは、著者がその必要性を強調するように、できる限り箱庭そのものに即した体験を取り上げようとする著者の意図からもたらされている。

箱庭療法に関する研究のむずかしさは、箱庭それ自体がきわめて臨床的な特質を有するものであるために、箱庭を研究のマテリアルとすることで箱庭が対象化されることになり、それによって箱庭の臨床性が失われ、研究成果が臨床実践に繋留されにくくなるという点にある。こうした点は研究と実践の往還を不可避とする心理臨床学研究の課題でもある。それに対して本論文は、著者の箱庭に向き合う姿勢の臨床的在りよう、「イメージ」と「関係性」という心理療法における鍵概念を関連づけて用いたこと、そうするための研究方法に創意工夫がなされていることによって、一般の調査協力者を対象とした実証的研究でありながらもきわめて臨床性の高い内容となっている。この点で、本論文は箱庭療法研究のみならず心理臨床学研究の研究スタイルに臨床性を含み込ませることに成功している。それが際立つのは、本論文の軸となる作り手の体験の言語化を扱った第2章において、作り手の自発的な言語化を尊重する姿勢が方法に活かされている点、「イメージ」と「関係性」を研究の俎上に乗せるために著者が独自に考案した「関係性図」において、箱庭と作り手の関係を二次元平面に表現するというこの手法が作り手の体験を表層的にしか捉えられないという危険性を有しつつも、そこに空間軸、時間軸を含み込んだ考察を加えることによって作り手の体験を重層的に捉えることに成功している点などである。

また、「イメージ」と「関係性」について論じる第3章において著者は身体感覚に言及しているが、この点も臨床的に意味深い。それが続く第4章の箱庭における作り手の身体感覚の議論につながっていくのであるが、この展開には、箱庭療法・心理臨床学における理論と実践の往還ないしは両者を架橋するものがあり、著者の研究者としての、そして心理臨床家としての将来性を強く感じさせるところである。

このような、研究に臨床性を含み込ませる著者の姿勢は、従来の箱庭療法研究とは異なる地平を切り開いている。これまで箱庭作品を言語化することは臨床的に否定的に捉えられてきた。言語化の意義を論じる研究もないわけではないが、それらは一種のアイディアの段階に留まるものであり、真の意味での臨床的議論とは異なっていた。しかし著者は、箱庭における「イメージ」と主体との「関係性」を身体感覚をも含めて論じるなかで、主体が「イメージ」を言語化することによりイメージの自律性が促進されることを指摘し、箱庭体験を言語化することによって主体が自身の感覚を強めるという変化が生じることを新たに見出し、箱庭体験の言語化における臨床的意義を明確に打ち出している。

以上のように、本論文は著者の本質的な問題意識とオリジナルな研究方法によって箱庭療法における臨床性を含み込んだ研究スタイルを提示しており、きわめて高く評価することができる。

ただし、本論文にも問題点がないわけではない。口頭試問では概念定義が論述のな

かで揺れる点、見守り手の要因、イメージの臨床性の理解といった点での課題が指摘された。

けれども、こうした点は本論文の価値をいささかも損なうものではなく、むしろ本論文をもとにした著者の今後の研究を創造的に切り開く課題として位置づけられるものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 29 年 2 月 1 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降